

『英和对訳袖珍辞書』の邦訳に見られる古義（続）

三好 彰

キーワード：英和对訳袖珍辞書 和訳英辞書 語義の意味変化
古義 和英語林集成

要旨

幕末の文久2(1862)年に刊行された『英和对訳袖珍辞書』の邦訳には、先行研究で誤訳とされていたものがある。しかし往時の言葉の意味（古義）では誤訳ではなく適訳であったことを筆者は先の報告『英和对訳袖珍辞書』の邦訳に見られる古義』で明らかにした。そこでは室町時代に日本イエズス会が編纂した長崎版『日葡辞書』に出ている単語を用いた。

本稿では『英和对訳袖珍辞書』と同時期に編纂されたヘボン著『和英語林集成』に出ている単語で上記の諸問題が解けることを明らかにすることができた。

1. はじめに

幕末の文久2(1862)年に刊行された『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）の邦訳に先行研究で誤訳とされていたものがある。しかし、その中に往時の言葉の意味（古義）では誤訳ではなく適訳であったことを筆者は先の報告『英和对訳袖珍辞書』の邦訳に見られる古義』（三好彰(2021)）で明らかにした。この報告では室町時代に日本イエズス会が編纂した長崎版『日葡辞書』を邦訳した『邦訳 日葡辞書』（土井他(1980)）に出ている古語に依って論じた。

本稿では『英和对訳袖珍辞書』と同時期に編纂されたヘボン (James Curtis Hepburn) 著『和英語林集成』に依って再検討する。なお『和英語林集成』の見出し語と比べ易くするために、漢字にルビが付されている『英和对訳袖珍辞書』の改訂第3版である『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）を多用する。

なおヘボン著『和英語林集成』は改訂が繰り返されたが、本稿では慶応3年(1867)に刊行された初版（ヘボン(1867)）と明治5年に刊行された再版（ヘボン(1872)）を用いる。『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）はヘボン(1867)とヘボン(1872)と出版年がほぼ同じであるので、漢字の同時期の読みを比べるのに都合が良い。

先の報告（三好彰(2021)）は『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）を2世紀半前の辞書『邦訳 日葡辞書』（土井他(1980)）を用いて考察したが、本稿では堀達之助(1862)とほぼ同時期に刊行されたヘボン(1867)、ヘボン(1872)で再検証することから始める。

言い換えれば『英和対訳袖珍辞書』が出てから1世紀半後の現代では分かりにくくなっている邦訳語の意味が『英和対訳袖珍辞書』と同時代に出た『和英語林集成』で確認できることを示す。

2. 勝俣詮吉郎の指摘した誤訳

(三好彰(2021))で指摘したことだが、勝俣詮吉郎(1914)が『英和対訳袖珍辞書』(堀達之助(1862))の誤訳と見なした1つに下記がある。

英語	To break a horse
邦訳	馬ヲ仕入レル

現在では「仕入る」は「販売や加工するために商品や材料を買い入れる」ないし「自分のものとしてあるものを手にいれる」という意味で使うが、英語 To break a horse は「馬を馴らす」という意味なので勝俣は誤訳と見なした。

三好彰(2021)で論じたように、『邦訳 日葡辞書』(土井他(1980))によれば「馬ヲ仕入レル」は「馬をしつける、飼い馴らす」となり、英語 “To break a horse” の意味に合う。

さて堀達之助(1862)の5年後に刊行されたヘボン(1867)では、その見出し語 SHI-IRE の意味は次のようである。

SHI-IRE, -ru, -ta	仕入	<i>t. v.</i> To buy, or lay in q quantity of anything in order to sell. Syn. SHI-KOMU
-------------------	----	---

ここで -ru は動詞の終止形、-ta 過去形を示しており、*t. v.* は他動詞の略である。それに続いて SHI-IRE の意味が英語で説かれているが、その中に「馬を馴らす」に該当する記述はない。

ところがヘボン(1867)の5年後に刊行されたヘボン(1872)では次のように改訂されている。

SHI-IRE, -ru, -ta	仕入	<i>t. v.</i> To buy, or lay in quantity of anything in order to sell, to instruct. Syn. SHI-KOMU
-------------------	----	--

このようにヘボン(1872)に to instruct の意味が加わり、to break a house が馬を訓練する、つまり馴らすことという英語の意味に適合する。

「仕入」の第一義はヘボン(1867)にあるように「販売のために物を買う」ことであり、第二義である「教える、馴らす」の意味をヘボン(1872)で補強、改訂したわけである。

なおヘボン(1867)の英和部で BREAK の邦訳は次のようである。

Kowasz, yaburu; tszbusz; kudaku; kudsz; oru; tatsz, kiru; abaku; somuku; hishigu; tenarasi.
最後尾の tenarasi が「馴らす」の意味である。

なお上述のようにヘボン(1867)では「ス」を sz、「ツ」を dz、「ツ」を tsz とするなど無声母音の表記に z を当てている。そしてヘボン(1872)では「ス」は su、「ヅ」は du、「ツ」は tsu などに表記法を変えている。

3. 杉本つとむ(1981)が指摘した誤訳

三好彰(2021)で指摘したように、杉本つとむ(1981)が『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）の誤訳だとみなした見出し語 Abolitionist, s. (s. は substantive (名詞) の略) の邦訳「^{スレーブ}奴僕ヲ賣買スルヲ支ル人」は、『邦訳 日葡辞書』（土井他 1980）によれば「支ル」は「さし止める、阻止する」の意味なので誤訳ではない。

堀達之助(1862)の5年後に刊行されたヘボン(1867)では、その見出し語 SASAYE の意味は次のようである。

SASAYE, -ru, -ta	ササヘル、支	<i>t. v.</i> To obstruct, block-up, hinder, impede, interrupt; to stop, check, prevent, restrain, intercept. Syn. SAYEGIRU, SAMATAGERU
------------------	--------	--

Syn. は同義語の略であるが、「SASAYE, -ru, -ta」の同義語として「SAYEGIRU 遮る」、「SAMATAGERU 妨げる」が挙げられていることから、ヘボン(1867)によっても「Abolitionist, s. ^{スレーブ}奴僕ヲ賣買スルヲ支ル人」は誤訳とへ言えないことが分かる。

ところで現代では「支える」に対応する英語とと言えば support であるが、ヘボン(1867)の SASAYE の項に support は出ていない。しかしヘボン(1872)には次のように出ている。

SASAYE, -ru, -ta	ササヘル、支	<i>t. v.</i> To obstruct, hinder, impede, to stop, check, prevent, restrain, intercept; sustain, support, preserve. Syn. SAYEGIRU, SAMATAGERU
------------------	--------	---

このようにヘボン(1872)は改訂されて support が付け加えられている。当時は「支える」の第一義は「遮る、妨げる」であって、「support 支援」は第二義だったと受け取れる。

4. 現在では使われなくなっている古語

勝俣詮吉郎(1914)と杉本つとむ(1981)が提起した問題を再考して、日本語の意味が時代とともに変化したために現代人から見ると『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）に不可解な邦訳があることが見えてきた。

意味が変化した語のほかに、現在では使われなくなった語がある。ここでは現在の国語辞典である『明鏡国語辞典』（北原保雄(2010)）に採録されていない下記の 11 語についてヘボン(1867)とヘボン(1872)で検証する。

エバ	、	シヨハユイ	、	^{スギワイ} 生計	、	^{セイロ} 正路	、	タデル	、	^{ナゲビヤ} 投火矢	、	ハシカ
^{ボレイ} 牡蠣	、	^ミ 箕ニテヒル	、	ムサムサシテ	、	^{ワタマシ} 移徒						

『英和对訳袖珍辞書』の改訂第3版である高橋新吉他(1869)では、餌にルビで「エバ」、生計にルビで「スギワイ」、正路にルビで「セイロ」、投火矢にルビで「ナゲビヤ」、牡蠣にルビで

「ボレイ」、箕ニテヒルにルビ「ミ」、移徒にルビで「ワタマシ」と付されている。このようにルビで示された語が『明鏡国語辞典』（北原保雄(2010)）に採録されていない。現代人には難解な、この11語をヘボン(1867)ないしヘボン(1872)で順に考察する。

(a) エバ

餌の意味の「エバ」は『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）の7つの見出し語の邦訳に出ている。その1つに下記がある。

Decoy, s. ^{エバ}餌、^{イクサ}軍ノ^{ギケイ}偽計

ヘボン(1867)に餌の意味の Yeba が下記のように出ており、意味が分かる。

Yeba 餌 the food of birds, or fishes

(b) シヲハユイ

『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）に、漢字「鹽」に「ハユキ」を送り仮名とする形容詞 *adj.* の用例が2つ、「ハユク」を送り仮名とする副詞 *adv.* の用例が1つ出ている。その1つに下記がある。

Saltish, *adj.* 鹽ハユキ

さらに漢字「鹹」に「シヲハユ」とルビを振った用例が2つある。その1つが下記である。

Brackish, *adj.* ^{シヲハユ}鹹キ

ヘボン(1867)に「シホハユシ」が下記のように出ており、「シホハユシ」が「塩辛い」の意味だと分かる。

SHIO-HAYUI, -KI, -KU, -SHI シホハユシ 鹹 *adj.* Salt in taste, salty

(c) スギワイ

『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）には、「生計」に「スギワイ」とルビが振られている邦訳が2つある。その1つに下記がある。

Sedentariness, s. ^{カシ}安閑ノ^{スギワイ}生計

ヘボン(1867)はカタカナ表記で「スギワイ」ではなく「スギハイ」としているが、ローマ字表記では SZGIWAI であって下記のようなのである。

SZGIWAI スギハイ 活業 *n.* A living, livelihood, occupation. Syn.
NARIWAI, KAGIYO, TOSEI

スギハイに漢字「活業」が当てられており、更に Syn. (同義語)として NARIWAI 生業、KAGIYO 家業、TOSEI 渡世が挙げられているので、その意味が分かる。

(d) セイロ

『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）に「正路」に「セイロ」とルビが振られている邦訳が次のように1つだけある。

Unfair, *adj.* 正路ナラヌ、偽詐^{キョウ}ノ、正直^{セイ}ナラヌ
ヘボン(1867) に「セイロ」が次のように出ている。

SEI-RO セイロ 世路 (yo no michi) *n.* The world, its pleasures and honors.

セイロの漢字に正路と世路の違いがあるが、yo no michi（世の道）という注釈があつて同義だと分かる。

(e) タデル

「タデル」は『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）に下記のように出ている。

Embrocate-ed-ing, *v. a.* タデル（薬ニテ）

ヘボン(1867) に「タデル」が下記のように出ており、「タデル」が「薬液を塗布する」の意味だと分かる。

TADE, -ru, -ta, タデル To foment, to stupe

(f) ナゲビヤ

『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）の Cracker, *s.* の邦訳に投火矢のルビとして「ナゲビヤ」が出ている。

Cracker, *s.* 遊^{アソ}ビニ用^{モチ}ユル^{ナゲ}ユル^{ヒヤ}投火矢（ナゲビヤ）、太平樂云フ人

ここで *s.* は名詞の略号である。

ヘボン(1867) およびヘボン(1872) の和英部の見出し語にナゲビヤは出ていないが、ヘボン(1872) の英和部の見出し語に CRACKERS があつて次のようである。

CRACKERS, *n.* Fire ---, kanshakudama.

このことからナゲビヤが「かんしゃく玉」のことだと分かる。なお *n.* は名詞の略語である。

(g) ハシカ

『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）に1つだけ「ハシカ」の用例が次のように出ている。

Awn, *s.* ハシカ 麦ナドノ穂

ヘボン(1867) に下記のように「ハシカ」が出ている。

HASH'KA ハシカ *n.* The beard of wheat, Syn. NOGI

ハシカとは「麦の^{のぎ}芒」のこと、つまり「麦の実の外殻にある針状の突起」のことだと分かる。ヘボン(1867) は Syn. つまり同義語 synonym として NOGI 芒を挙げている。

なおヘボン(1872) では見出し語のローマ字表記が HASHIKA と変わっているが、意味は上記のままである。

(h) ボレイ

『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）には牡蠣のルビに「ボレイ」と振られている用例が下記のように1つだけある。

Oyster, s. ^{ボレイ}牡蠣

ヘボン(1867)に「ボレイ」が下記のように出ており、牡蠣のことである。

BOREI ボレイ 牡蠣

(i) 箕ニテヒル

『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）には6つの見出し語の邦訳に「箕ニテヒル」が出ている。その中の1つに下記がある。

Winnow-ed-ing, v. a. 箕ニテヒル、^{アヲ}扇グ、^{エヲ}選ム

ここで v. a. は他動詞の略語である。そして過去形と進行形が **-ed-ing** のように示されている。

ヘボン(1867) およびヘボン(1872) に下記の用例が出ている。

MI 箕 n. A kind of shallow basket used for
cleaning rice. *Kome wo mi de hiru.*

これによると、箕とは「米のよごれを除去するために使う浅い笊」である。そして、その用例として *Kome wo mi de hiru.* (米を箕で簸る) が挙げられていて「箕ニテヒル」の意味が分かる。

(j) ムサムサシテ

『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助(1862)）に「ムサヽヽ」の用例が3つ出ている。その1つに下記がある。

Slovenliness, s. ムザヽヽシテ居ルヲ

ヘボン(1867)に「ムサムサシテ」が下記のように出ている。

MUSA-MUSA-SH'TE ムサムサシテ adv. Idem.

意味の項が Idem. (同上) なので、1つ前の見出し語を見ると次のようである。なお adv. は副詞の略号である。

MUSA-KUSA-SH'TE ムサクサシテ adv. Perplexed, distracted, vexed.

ヘボン(1872)の見出し語に「ムサムサシテ」は無いが、「ムサムサ」があつて、その用例に ---shite として次のように出ている。

MUSA-MUSA. ムサムサ adv. Confused, perplexed, distracted. *Kokoro ---
shite mune ga ippai ni naru.*

“*Kokoro ---shite mune ga ippai ni naru.*” は「心がムサムサして胸がいっぱいになる」と読める。そして英単語 Confused, perplexed, distracted と合わせて、「心が晴れない」ことだと分かる。

(k) ワタマシ

「ワタマシ」は『和訳英辞書』（高橋新吉他(1869)）に下記のように出ている。

Transmigrant, adj. ^{ワタマシ} 移徒スル

ヘボン(1867) にワタマンが下記のように出ている。

WATAMASHI ワタマシ 徒家 Moving into a new house

ワタマシの漢字を「徒家」としていて高橋新吉他(1869)の「移徒」と違っているが、英語の意味 Moving into a new house から、高橋新吉他(1869)の英語の見出し語 Transmigrant と同義であることが分かる。

5. まとめ

筆者は先の報告（三好彰 20219 で、先行研究者の勝俣詮吉郎と杉本つとむが『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助 1862）に誤訳があると見なしていた To break a horse と Abolitionist の邦訳が、室町期に編まれた『日葡辞書』によれば誤訳ではなく適訳であったことを明かにした。

本報告では室町期に編まれた『日葡辞書』に遡ることまでもなく、『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助 1862）と同時期に編纂されたヘボン著『和英語林集成』（初版 1867, 再版 1872）によって、To break a horse と Abolitionist の問題、および現代人には難解な邦訳語も解き明かすことが出来ることを明かにした。

言い換えれば、『日葡辞書』での用法が幕末に刊行された『英和对訳袖珍辞書』でも使われているが、現代では使わなくなったために誤訳であるとか意味が不明だと見なすようになっていく。現代人には難解な古義だが、明治維新前後の人々には問題無く通じた当代の言葉だった。

参考文献

土井忠生他編訳(1980)『邦訳 日葡辞書』東京：岩波書店

注：『邦訳 日葡辞書』は1603年に日本イエズス会が刊行した長崎版『日葡辞書』の邦訳版である。

ヘボン(Hepburn, James Curtis (1867))『和英語林集成』 Shanghai: American presbyterian mission press

ヘボン(Hepburn, James Curtis(1872))『和英語林集成』 Second Edition, Shanghai: American presbyterian mission press

堀達之助編(1862)『英和对訳袖珍辞書』江戸：洋書調所

勝俣詮吉郎(1914)「最初の英和対訳字書（其二）」『英語青年』(Vol. XXXII, No.2) 、 p. 56

北原保雄編(2010)『新明鏡国語辞典』東京：大修館書店

杉本つとむ(1981)『江戸時代 翻訳日本語辞典』東京：早稲田大学出版部

高橋新吉他編(1869)『改正増補和訳英辞書』 Shanghai: American presbyterian mission press

Semantic Change in the “*Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho* (1862)”, the First Commercial English-Japanese Dictionary (Continued)

Akira MIYOSHI

Keywords: A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language compiled by T. Hori, Semantic Change of Words, A Japanese and English Dictionary compiled by J. C. Hepburn

Abstract

This is my second paper on Semantic Change found in the *Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho* or the first commercial English-Japanese dictionary published in 1862.

My previous paper issued in 2021 made it clear that some Japanese definitions in the dictionary, which are considered to be incorrect by some experts, turn out to be correct in their original sense found in the *Nippojisho* or the Japanese-Portuguese dictionary published by the Society of Jesus in 1603. In other words, the meaning of some Japanese words has changed. But it is a problem that *Nippojisho* was no longer readily available even in 1862.

However, there was a new dictionary called *A Japanese and English dictionary* compiled by J. C. Hepburn in 1867 which has so many similar Japanese words found in *Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho*, that problems raised in the previous paper are solved correctly. No change in meaning is found in both dictionaries. since Hepburn's dictionary and *Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho* were published in the same time period.

(みよし・あきら)